




論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	池淵 久美
学位論文名	Relationship Between Oral Function and Cognitive Status Among Community-dwelling Older Adults: An Observational Cross-sectional Study	
学位論文審査委員	主査	深見 達弥 
	副査	佐野 千晶 
	副査	吉野 純 

論文審査の結果の要旨

本研究は、島根県地域在住後期高齢者における口腔機能・口腔衛生状態と認知機能との関連を明らかにすることを目的とした観察横断研究である。高齢化の進行に伴い認知症患者は世界的に増加しており、社会的孤立や生活習慣と並んで、口腔機能低下 (oral frailty/oral hypofunction) が修正可能な関連因子として注目されている。しかし、地域在住高齢者を対象に、客観的な口腔指標と認知機能との関連を大規模集団で検討した報告は限られている。申請者らは、島根県後期高齢者医療広域連合が実施した健康診査および歯科口腔健診データ (2020年4月～2022年3月) を用い、両健診を受診した75～85歳の地域在住高齢者を対象に解析を行った。欠損データを有する症例を除外した結果、4,338名が解析対象となった。背景因子として年齢、性別、下腿周囲長、既往歴、生活習慣等を収集し、口腔指標として咀嚼機能、嚥下機能、口腔衛生状態、口腔乾燥などを評価した。認知機能は質問票による「物忘れ」および「日付の失念」を指標とし、目的変数としてロジスティック回帰分析を行った。その結果、「物忘れあり」は年齢、性別、下腿周囲長、咀嚼機能、嚥下機能、口腔衛生状態、喫煙状況、社会参加、整形外科疾患と有意に関連していた。また「日付の失念」は、年齢、下腿周囲長、口腔乾燥、社会参加、脳卒中既往、整形外科疾患と有意な関連を示した ( $p < 0.05$ )。すなわち、認知機能低下は身体的予備能の低下や基礎疾患のみならず、咀嚼・嚥下機能や口腔衛生状態と独立して関連する可能性が示唆された。

本研究は、4,000例を超える大規模地域在住高齢者を対象に、口腔機能および口腔衛生と認知機能との関連を示した点で学術的意義が高い。一方、横断研究であるため因果関係の推論が困難であること、健診受診可能な比較的健康な高齢者が中心となる選択バイアス、認知機能評価が質問票に基づく点などが限界として挙げられる。以上より、口腔機能・口腔衛生の維持が認知機能低下の早期予防と関連し得ることが示され、歯科口腔保健を地域包括ケアの枠組みで認知症予防戦略に統合する重要性が示唆された。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、自身の学位論文の内容について、研究背景、目的、方法、結果および考察を簡潔かつ的確に説明した。質疑応答では、横断研究という研究デザインの限界、因果関係を直接推論できない点、認知機能評価指標の妥当性、サンプル選択バイアスおよび欠損データの影響など、本研究が有する方法論的制約について十分に理解していることが確認された。また、統計解析結果の解釈においても、統計的有意性と臨床的意義を区別し、結果を過度に一般化しない慎重な姿勢を示した。さらに、本研究を踏まえた今後の課題として、縦断研究やより客観的な認知機能評価を用いた発展的研究の必要性を自ら言語化できており、研究者としての基礎的学力および応用力は十分であると判断した。以上より、申請者は本学博士課程修了者として求められる学力および研究遂行能力を有していると認められる。 (主査 深見 達弥)

申請者は、高齢者の健診質問データを用いて、認知機能低下と口腔衛生との関連性を検討し、認知機能低下と咀嚼機能、嚥下機能、口腔乾燥感との関連性が高いことを明らかにした。認知症発症予防の公衆衛生対策を進める上で有益な知見であり、周辺関連知識も豊富であり学位授与に値すると判断した。 (副査 佐野 千晶)

申請者は、島根県の歯科口腔健診データを解析し、認知機能低下が咀嚼・嚥下機能、口腔衛生状態と関連することを発表した。島根県の地域医療、予防医療という観点でも有意義な結果であり、また申請者のバックグラウンドからも今後のさらなる発展が期待される研究であり、学位授与に値すると考えられる。 (副査 吉野 純)

(備考) 要旨は、それぞれ400字程度とする。